



A-1 修徳

分科会 主旨

共存地区である修徳学区を歩く A-1 コースでは、一般市街地での先進的な景観まちづくりの事例を、伏見の旧市街地を歩く職住 A-2 コースでは、京都の新景観条例の果たす役割を、京都の景観論争の発端にあたる京都駅周辺を歩く A-3 コースでは、総論としての京都の景観政策を、それぞれ視察した。その後の分科会では、3つのコースが一堂に会して、参加者の感想やそれぞれの地域での取り組みを聞きながら、まちなみ形成とコミュニティの関わりを考察し、積極的な意見交換をした。

意見交換 A-1

- ・職住一致が崩れ人と人をつなげるものが希薄になってしまい、まちづくりの前にコミュニティ作りから始めなければいけない難しさを感じた。
- ・まちづくりのシステムを構築する以前に、地域住民の地域への愛情が大前提だということがよく判った。
- ・新景観法の誘導による庇等は、外国人から見た京都と同じ。マンション住民と旧住民間の違和感と同じ違和感があるように思う。

住民一人一人が周りを見渡して配慮して、デザインコードに頼らない景観まちづくりを進めるべきである。

意見交換 A-2

- ・伝統的な建物と近代的な建物がバランスよく配置されており、歴史の重みと暮らしの息づかいが感じられる景色に感動した。



A-2 伏見

- ・新景観法により資産価値が下がるとか不自由だと

A 分科会 「景観まちづくり」

司会	西田教子（京都府建築士会）
アシスタント	赤澤芳子（京都府建築士会）
アシスタント	見子小寿恵（京都府建築士会）
コーディネーター	高田光雄 先生（京都府建築士会）
出席者	9 6 名（他 近畿スタッフ 17 名）

いうデメリットより、規制により統一感のある景観が守られるメリットの方が大きいと感じられていることが印象的だった。

- ・集合住宅の取って付けたような勾配屋根や壁の蔵風の装飾はいかがなものか？

伝統も含めた暮らし方を次代に伝えていくことが、人々の心のよりどころになり、法的なデザインコードを超えて、自ずから良い景観が醸成されていくのではないか。

意見交換 A-3

- ・屋上の看板が気になる、一番気になるのは京都駅、論争になった京都タワーは今は愛すべきものかも。
- ・あくまでも生活が中心で観光と生活とのバランスを図るべき。都市の中では高層ビルの借景は否定できない。
- ・新しいものと守るべきものが融合している京都の景観を見て、伝統の中で新しいものを受け入れてきた京都のしたたかさを感じた。

自分達の地域でも、この京都の知恵を生かせないか？



A-3 京都駅

まとめ

景観まちづくりに取り組む地域において、住民を中心とした行政・専門家(大学・建築士会等)の協働がこれからますます求められ、なおかつ、住民の意識や関係性が、まちの景観として現れるとすれば、私たち建築に携わる者はそれぞれの活動地域で、周囲との関係性を考慮した建築への誘導だけでなく、安心安全等の地域の問題への解決も含めた、人づくり・まちづくりにも積極的に、しかし地道に取り組んでいくべきであろう。